[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。  
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。  
  
　　  
  
、、、、、、、、、、、、、、　孫子曰く、およそ火攻（かこう）に五あり。一に曰く、人を火（や）く、二に曰く、積（し）を火（や）く、三に曰く、輜（し）を火（や）く、四に曰く、庫（こ）を火（や）く、五に曰く、隊（たい）を火（や）く。火（ひ）を行（おこな）うには必ず因（いん）あり。煙火（えんか）は必ず素（もと）より具（そな）う。火を発するに時あり、火を起こすに日あり、時（とき）とは天の燥（かわ）けるなり。日とは、月の箕（き）・壁（へき）・翼（よく）・軫（しん）にあるなり。およそこの四宿（ししゅく）は風起（おこ）るの日（ひ）なり。  
■火人　兵舎、兵営に居る人、山野に居る人に火を放ち、焼き殺すこと。■火積　集積した食糧、煮炊きする薪（たきぎ）、牛馬の飼料を焼くこと。■火輜　運搬中の器械、財貨及び軍士の衣裝を焼くこと。■火庫　輜が収蔵された舎を焼くこと。■火隊　釈が分かれる。武器を焼く、隊伍に火を放ち隊列を乱し攻撃するなどとされるが、隊duìは金文では\*1であり、阝(fǔ;神梯)と㒸(suì; 殺されて耳をたれる犬牲) からなり神霊が降り立つ墜（ち；地）が原義。㒸が墜（お）ちる、墜とす義で用いられており、説文では隊が墜を兼ねており、橋などを焼き落とし運搬を阻止することでもある。■行火は火を用いること。因については、曹操は内応者を想定するが、有因は原因があること、それなりの条件が整う必要があること。■煙火は煙と火。■具jù\*2は貝と廾からなり、貝は鼎dingの略であり、両手で鼎を奉じる形。物が備わること。燃やすには、煙を出して燃える物（可燃物）と火種の両方が備わっていなければならない。■発火には乾燥が必要。■起火には風が必要。　■次と宿　木星は天球を十二年で一周する。木星の運行する道筋の星座（宿）を十二の次（やどり）に分け、木星のある次によって歳（年）を定める。十二次と二十八宿（[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/skz2.htm)）宿：赤経8時～16時（[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/sz8-16.pdf)）、宿：赤経16時～24時（[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/sz16-24.pdf)）、宿：赤経0時～8時（[HP](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/sz0-8.pdf)）月が当宿にある日（11月23日——12月7日箕宿、 2月19日——3月5日壁宿、 8月12日——8月22日翼宿 、8月23日——8月26日轸宿（百度知道[HP](https://zhidao.baidu.com/question/524978590.html)）とされています。  
\*1 \*2  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、　およそ火攻（かこう）は、必ず五火（ごか）の変に因（よ）りてこれに応ず。火（ひ）、内（うち）に発すれば、早くこれに外（そと）に応ず。火（ひ）発してその兵静（しず）かなるは、待（まち）て攻せむることなかれ。その火力（かりょく）を極め、従うべくしてこれに従い、従うべからずして止やむ。火（ひ）、外に発すべくんば、内（うち）に待つことなく、時をもってこれを発せよ。火（ひ）、上風（じょうふう）に発すれば、下風（かふう）を攻むることなかれ。昼（ひる）の風は久しく、夜の風は止（や）む。およそ軍は必ず五火（ごか）の変あるを知り、数（すう）をもってこれを守（まも）る。.  
■火攻めに対する対応。■發fā\*は癶()と弓と殳からなり、癶は左右の足をそろえ出発を用意する姿勢、弓と殳は弓を発射すること、射弓が開戦の始まり。火發は火を点火すること。内外は敵の内外、内通者あるいは間者が火を放ち内部が騒然とすれば、直ちに外から攻撃する。■極は、詩や書では、「いたる」、「すみやか」、「きわむ」、「ころす」義で用いられている。火が燃え盛った時点で、速やかに、攻めるか、止めるかを見極め、殺す。■外から火攻めすれば十分なら、内から火の手が揚がらなくても、条件のよい時に火を放て。風の向き、風の持続時間について留意せよ。■數はここでは自然の理、「夫窮高則危，大滿則溢，月盈則缺，日中則移，凡此四者，自然之數也（夫れ高さ窮まれば則ち危し、大いに滿てば則ち溢（あふ）る、月盈（み）てば則ち缺（か）く、日中せば（中天、正午になれば）則ち移る，凡そ此の四つは、自然の數なり）」と。  
\*  
  
、、、、　ゆえに火をもって攻（こう）を佐（たす）くる者は明（めい）なり。水をもって攻（こう）を佐（たす）くる者は強（きょう）なり。水はもって絶（たつ）べく、もって奪（うば）うべからず。  
■佐zuǒ\*1は人と左zuǒからなる。左は左手に工を持つ形、右yòu\*2は右手に𠙵（起請文の容器）を持つ形。尋xún \*3は左手に工右手に𠙵を持ち、神意を伺うこと。佑は神や天が人に「たすけ」をもたらすこと、佐は人に「たすけ」をもたらすこと。■明は繋辞伝に、（聖人が易を作って・・・）「神明の徳に通ず」とあり、以數守之して火を用いれば火の徳に通じ、奪うことができる。■強qiángは弓と弦による張力の強さをいう、元来は彊字で田の境界を区切ること。水攻めは通路を絶ち敵軍を分断する、供給路を絶つに有効とする。  
\*1\*2\*3  
  
、、、、、、、、、　それ戦勝（せんしょう）攻取（こうしゅ）して、その功（こう）を修めざるは凶（きょう）なり。命（な）づけて費留（ひりゅう）と曰いう。ゆえに曰く、明主（めいしゅ）はこれを慮（おもんぱか）り、良将（りょうしょう）はこれを修む。利にあらざれば動かず、得（う）るにあらざれば用（もち）いず、危（あや）うきにあらざれば戦わず。  
■戦勝攻取は、戦いに勝ち占領すること。■修xiū\*1は攸yōu\*2と彡shānからなり、攸は人の後ろから水をかける形で身を浄める“みそぎ”、彡は文様の美しいこと、原義は祭祀に際して身を浄めること。修功は功績を衆人に明らかにして賞すこと。■凶xiōng\*3は凵kǎnとＸからなり、凵は胸郭で枉死者の胸郭に付されたＸ印であり、その怨みを抱く霊がなす災いを止めるためになされる。凶はその災い。■命míng\*4は、令lìngと𠙵からなり、令は礼冠を著けて跪く形、神の啓示を受けることが原義。功あるを賞さぬことの凶、授かるのは費留。■費留fèi liú　費を惜しむこと。ケチの怨みを受く。命令とケチ、生命とケチの対比ともとれる。大いに得ねば褒賞は不可、利無き戦に動くな。  
\*1\*2\*3\*4  
  
、、、、、、、、、、、主は怒りをもって師を興（おこ）すべからず、将（しょう）は慍（いきどお）りをもって戦いを致すべからず。利に合（がっ）して動き、利に合（がっ）せずして止（や）む。怒りはもってまた喜ぶべく、慍（いきどお）りはもってまた悦（よろこ）ぶべきも、亡国（ぼうこく）はもってまた存（そん）すべからず、死者はもってまた生（い）くべからず。ゆえに明君（めいくん）はこれを慎（つつし）み、良将（りょうしょう）はこれを警（いまし）む。これ国を安（やす）んじ軍を全（まっと）うするの道（みち）なり。  
■怒nùは悪口、中傷、侮蔑などでカッカと頭に血がのぼること。■慍yùnは遺恨があり心がふつふつたぎること。■喜xǐは**壴**zhù（鼓）と𠙵からなり、神楽が原義、褒められたり、欲しいものが手に入り心がうきうきすること。■悅yuèは忄xīn（心）と兌yuèからなり、兌は神官に神気が降りているさまであり、心が恍惚としているさま。怨みが解ければ、心にこみあげるものがある。■亡wáng死sǐは復すことがない。戦わずして勝つならば、亡死はない。  
了　2020.12.27  
  
**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）  
  
曹操曰く、火を以て人を攻む、當に時日を擇ぶなり。  
王晳曰く、兵を助け、勝を取るには、虛發（空発）を戒むなり。  
張預曰く、火を以て敵を攻むには、當に姦細（間者）を潛行せしむべし。地里の遠近、途徑の險易、先ず之を熟知せば、乃ち往く可し。故に〈九地〉に次ぐ。  
  
（孫子曰：凡火攻有五：一曰火人，）  
李筌曰く、其の營を焚き、其の士卒を殺すなり。  
杜牧曰く、其の營栅を焚き、因りて兵士を燒く。吳起が曰く、「凡そ軍が荒澤に居らば、草木幽穢（群生）す、焚きて滅す可し」と。蜀の先主（劉備）吳を伐つ。吳將の陸遜は之を夷陵に拒むに、先ず一營を攻むも利せず。諸將が曰く、「兵を空しく殺すのみ」と。遜が曰く、「吾已に曉に敵の術を破れり」と。乃ち各（おのおの）に敕し（命じ）一把茅を持たせ、火を以て之を攻めて拔く。一爾（たちまち）勢を成し、諸軍を通じて率い、同時に俱に攻め、張南、馮習及び胡王沙摩柯等を斬り、四十餘營を破り、死者は萬を數う。備（劉備）は因りて夜遁（よにげ）し、軍資器械を略し盡し、遂に歐血（吐血）して殂（死亡）す。  
梅堯臣曰く、營栅荒穢（群生草木）を焚き、以て攻戰を助くなり。  
何氏曰く、魯の桓公の世に、邾婁の咸丘を焚く。始めて火を以て攻むなり。後世の兵家が流（布）す、故に五火の攻有り、以て取勝の道を佐（たす）くなり。後漢の班超（はんちょう）を西域に使すが如し。鄯善（トルファン）に到り、初夜に、將吏士は虜營（夷狄の陣営）に奔る。天の大風に會い、（班）超は十人に令して鼓を持たせ虜舍の後に藏（かく）し、約して曰く、「火が燃えるを見れば、皆當に鼓を鳴らし大いに呼ぶべし」と。餘人は悉く兵弩を持ち、夾き門に伏す。超は風に順いて火を縱（はな）ち、前後に鼓し譟（さわが）せば、虜眾は驚亂す。超は三人を手格殺し（殴り殺し）、餘眾は悉く燒け死ぬ。又，皇甫嵩（こうほすう）は兵を率て黃巾賊の張角を討つ。嵩は長社を保ち、賊が來りて城を圍む。嵩兵は少く、軍中皆て恐れる。軍吏を召して謂りて曰く、「兵には奇變有り、眾寡に在らず。今賊は草を結いたる營に依る。易すく風火を為す。若し、夜に因りて火を縱たば、必ず大いに驚亂す。吾は兵を出して之を擊たば、其の功成る可し」と。其の夕に遂に大風、（皇甫）嵩は乃ち軍士に約勒（手はずしたように）、皆て苣（たいまつ）を束ね城に乘（登り）、銳士をして圍の外へ出だし、火を縱ち大いに呼ばしめ、城上では燎（かがり火）を舉げて之に應ず。嵩は鼓に因りて其の陳を奔（はし）らせ、賊は驚亂して奔走し、大いに之を破る。又五代梁の太祖（朱全忠）は乾寧中に、親ら大軍を領い、鄆州に由り東路北に魚山に次。朱宣（しゅせん；天平軍節度使）瑾（しゅきん；泰寧軍節度使朱瑾）覘い知り、即ち兵を以て徑（ただち）に至り、且つ速戰を圖る。帝は軍を整え寨（とりで）を出ず。時に宣・瑾は已に前に陳す。須臾（しばらくして）、東南の風が大いに起り、帝軍の旌旗は失次（次序錯乱）し、甚しく懼色有り。帝は即ち騎士に令して鞭を揚げて呼嘯せしむ（鋭く長い音をたてさせる）。俄而（にわかに）、西北の風が驟發す（突然に吹く）。時に兩軍は皆て草莽中に在り、帝は因りて火を縱た令む。既にして煙は天に燄（も）え亘（わた）り、勢に乘りて以て賊陳を攻む。宣・瑾大いに破れ、餘眾は清河に擁入す（一斉に群がり入る）。因りて魚山の下に京觀（敵戦死者の塚及び戦勝記念碑）を築きぬ。又後唐が蜀を伐つ、工部任圜（じんえん）は大軍を以て漢州に至る。康延孝（こうえんこう）來りて逆戰（迎戦）す。圜は董璋（とうしょう）に命じ東川の懦（弱）卒を以て其の鋒に當らせ、其の後に精兵を伏せる。延孝は東川の軍を擊退し、之を急追し、伏兵に遇い、延孝は敗れて、漢州に馳せ入り、壁を閉じて出でず。西川の孟知祥は兵二萬を以て、圜と勢を合せて之を攻める。漢州は四面を樹竹木が栅を為す。三月、圜は金鴈橋に陳す、即ち諸軍を率い鼓譟して進み、四面に火を縱つ。風は空に燄え亘る。延孝は危急、騎を引き出でて金鴈橋に陳す、又大いに之を敗る。  
張預曰く、彼の營舍を焚き、以て其の士を殺すは、火攻の先なり。班が匈奴の使者を燒くは是なり。  
  
（二曰火積，）  
李筌曰く、積聚（積累聚集）を焚くなり。  
杜牧曰く、積は積蓄なり、糧食薪蒭（薪柴と牧草）是なり。高祖と項羽とは成皐に相持（雙方對立）し、羽の為に敗る所となり、北（に）げて河を渡る。張耳、韓信軍を得る。脩武に軍し、深溝高壘、劉賈をして二萬人、騎數百を將（ひき）いしめ、白馬津を渡り、楚地に入り、其の積聚を燒き、以て其の業を破る。楚軍は食に乏す。隋の文帝の時、高熲（こうけい）は獻じて陳之策を取りて曰く、「江南は土薄（小砂の土地）、舍は茅竹が多く、儲積（儲蓄積聚）の有る所は皆て地窖（地下室）に非ず。密に行人を遣わし、風に因りて火を縱つ可し。彼の修葺（修理）を待ち、復（また）更に之を燒け。數年を出でずして、自ら財力俱（ことごと）く盡（つ）く可し」と。帝は其の策を行い、是に由りて、陳人は益（ますます）弊す。  
梅堯臣曰く、其の委積を焚き、以て芻糧を困す。  
張預曰く、其の積聚を焚き、芻糧を不足せしむ。故に曰く、「軍に委積無くば則ち亡ぶ」と。劉賈（りゅうか）が楚の積聚を燒くは是なり。  
  
（三曰火輜，四曰火庫，）  
李筌曰く、其の輜重を燒き、其の庫室を焚く。  
杜牧曰く、器械、財貨及び軍士の衣裝、車中に在りて上道（出発）し未だ止まらざる（運搬中のもの）を輜と曰い、城や營壘に在り已に舍に有り止る（収蔵したもの）を庫と曰い、其の藏す所二つは皆て同じ。後漢の末，袁紹（えんしょう）の相の許攸（きょゆう）が曹公に降り、曰く、「今袁氏の輜重は萬餘の輛車を有すも、屯軍は嚴しからず。今、輕兵を以て之を襲い、不意にして至り、其の積聚を焚けば、三日を過ぎずして、袁氏は自ら敗れん」と。公は大いに喜び、精騎五千を選び、皆て袁氏の旗幟を用い、馬の口に銜枚して（木片をかませて）縛り、間道により出入し、束薪を抱え、歷道に問すこと有る所は、之に語りて曰く、「袁公は曹操が後軍を抄略（掠奪）すを恐れ、遣兵し以て備えを益す」と。聞者は信じ以て然りと為し、皆て自若す（落ち着いていた）。既にして圍屯に至れば、大いに火を放ち、營中は驚亂し、因りて大いに之を破り、輜重悉く之を焚きぬ。  
陳皥曰く、夫れ敵に愛惜の物有れば、亦以て之を攻む可し。彼若し出でて救わば、是れ我火を以て其の勢を分つなり。更に其の心神の撓惑（迷い困惑）すに遇えば，自（おのづか）ら軍を破り將を殺す可きなり。  
梅堯臣曰く、其の輜重を焚き、以て貨財を窘（くるし）める。其の庫室を焚き、以て蓄聚を空（から）にす。  
何氏曰く、前秦の苻堅（ふけん）が將の王猛（おうもう）を遣わし前燕の幕容暐（ぼようい）を伐つが如し。師は潞川に至り、燕將の慕容評（ぼようひょう）は兵四十萬を率いて之を禦ぎ、以て持久して之を制す。猛は將の郭慶（かくけい）を遣わし、步騎五千を率いて、夜に間道により、晉山に火を起こし、評が輜重を燒けば、火は鄴（前燕の都）中に見ゆ。因りて之を滅ぼす。  
張預曰く、其の輜重を焚き、器用をして供せしめず。故に曰く、「軍に輜重無くば則ち亡ぶと。」曹操が袁紹の輜重を燒くは是なり。其の府庫を焚き、財貨をして充（み）たしめず。故に曰く、「軍に財無くば、則ち士は來らず」と。  
  
（五曰火隊。）  
李筌曰く、其の隊の仗兵器を焚く。  
杜牧曰く、其の行伍を焚き、亂に因りて之を擊つ。  
梅堯臣曰く、其の隊仗を焚き、以て兵具を奪う。  
「隊」は一に「隧」と作（なす）。  
賈林曰く、隧は道なり。燒きて糧道及び轉運を絕つなり。  
何氏は賈林が註に同じ。  
張預曰く、其の隊仗を焚き、兵をして戰具無からしむ。故に曰く、「器械に利せずんば、則ち以て敵に應じ難し」となり。  
  
（行火必有因，）  
曹操曰く、姦人に因る。  
李筌曰く、姦人に因りて內應すなり。  
陳皥曰く、須べからく其の便を得れば、獨り姦人にあらず。  
賈林曰く、風の燥に因りて之を焚く。  
張預曰く、凡そ火攻は、皆て天時の燥旱に因り、營舍の茅竹、積芻聚糧、居近の草莽を風に因りて之を焚く。  
  
（煙火必素具。）  
曹操曰く、煙火は燒具なり。  
李筌曰く、幹芻（干し草）、蒿艾（よもぎ）、糧糞（？役に立たない食糧）の屬。  
杜牧曰く、艾蒿、荻葦（おぎあし）、薪芻（薪と牧草）、膏油（粘性油）の屬、先ず須べからく事を修め以て用に備う。兵法に「火箭（や）、火簾（すだれ）、火杏（火炎玉）、火兵（火攻兵）、火獸（火攻獣）、火禽（火攻禽）、火盜（？忍び込み火を放つ）、火弩（いしゆみ）」有り、凡そ此れは皆て用う可し。  
梅堯臣曰く、潛かに姦（狡猾にだまして）して隙を伺えば、必ず便（有利の機会）有り。秆（稲などの茎）を秉（にぎ）り燧（火打ち石と火打ち金）を持ち、必ず先に備うなり。『傳』に曰く「惟（ただ）事事（すべて）に備え有れば、乃ち患（うれい）無きなり」と。  
張預曰く、貯火の器，燃火の物、常に須べからく預備（準備）して、便を伺いて發せよ。  
  
（發火有時，起火有日。）  
梅堯臣曰く、妄に發せず。  
張預曰く、偶然なる可からず、當に伺くの時日とすべし。  
  
（時者，天之燥也；）  
曹操曰く、燥は旱なり。  
梅堯臣曰く、旱熯せ（カラカラに乾けば）ば燎し（山野を焼き払い）易し。  
張預曰く、天の時、旱燥せば、則ち火は燃え易し。  
  
（日者，月在箕、壁、翼、軫也。凡此四宿者，風起之日也。）  
李筌曰く、〈天文志に〉、「月は此に宿せば風多し」と。『玉經』に云く、「常に月を以て日に加え、營室より順數十五にして翼に至る、月在りて此に宿すなり」と。  
杜牧曰く、宿は月の宿る所なり。四宿は、風の使なり。  
梅堯臣曰く、箕は龍尾なり。壁は東壁なり。翼、軫は鶉尾なり。宿在は、月の次ぐ所を謂うなり。四宿は風を好（よみ）し、月離れて必ず起る。  
張預曰く、四星は風を好（よみ）す、月が宿せば則ち起る。當に推步（天体の運行を推測）して次を躔（めぐ）るがごとく、宿る所の日を知れば、則ち火を行（もち）う。一に說く、春は丙丁、夏は戊己、秋は壬癸、冬は甲乙、此の日に疾風猛雨有り。又、（占風法〉、雞羽を取り、八兩を重ね、五丈竿上に掛け、以て風を候い從う所に來る。四宿は即ち箕、壁、翼、軫也。  
  
（凡火攻，必因五火之變而應之。）  
梅堯臣曰く、火に因りて變を為す、以て兵は之に應ず。  
張預曰く、其の火變に因りて、以て兵は之に應ず。五火は即ち「人、積、輜、庫、隊」なり。  
  
（火發於內，則早應之於外。）  
曹操曰く、以て兵は之に應ず。  
李筌曰く、火勢に乘りて之に應ず。  
杜牧曰く、凡そ火は、乃ち敵人をして驚亂せしむ、因りて之を擊つ。空（ひたすら）火を以て敵人を敗るを謂うに非ず。火を聞きて初めて（驚亂が）作（おこ）れば即ち之を攻む。火闌（たけなわ）にして眾定まりて之を攻むが若きは、當に益無し、故に早と曰うなり。  
杜佑曰く、間人をして敵の營內に火を縱たしめば、當に速に進み以て其の外を攻むなり。  
梅堯臣曰く、內は驚亂の若く、外は兵を以て擊つ。  
張預曰く、火が纔（わずか）に內に發（おこ）れば、則ち兵は急ぎて外に擊て。表裏齊（ひと）しく攻めば、敵は驚亂し易し。  
  
（火發兵靜者，待而勿攻；）  
杜牧曰く、火作（おこ）りて驚かず、敵に素より備え有れば、遽（にわか）に攻む可からず、須べからず其の變を待つべきものなり。  
梅堯臣曰く、撓くに驚かざるは、必ず備え有り。  
王晳曰く、以て變ぜずなり。  
何氏曰く、火作りて敵が驚呼せざるは、備え有るなり。我が往きて攻ねば、則ち反（かえ）りて或いは害を受く。  
張預曰く、火が發（おこ）ると雖も而（しか）るに兵が亂れざるは、敵に備え有るなり。復（また）其の變を防ぐ、故に可む攻からず。  
  
（極其火力，可從而從之，不可從而止。）  
曹操曰く、見て可ならば進み、難と知れば退け。  
李筌曰く、夫れ火を發ちて、兵が亂れずんば、攻む可からず。  
杜牧曰く、火が盡已來（燃えさかる）を俟ち、若し敵人が擾亂せば（騒ぎ乱れる）、則ち之を攻める。若し敵が終（つい）に靜かで擾（さわ）がずんば、則ち兵を收めて退くなり。  
杜佑曰く、利と見れば則ち進み、難と知れば則ち退け。極は盡なり。火力が盡して（盛んとなる）、可なれば則ち應じ、不可ならば則ち止（や）む、敵をして其の為す所を知らしめること無かれ。  
梅堯臣曰く、其の火勢を極め、其の變を待ちて攻む、不變ならば則ち攻むこと勿れ。  
王晳曰く、其の變亂を伺い、則ち之に乘ず。終に變亂せずんば、則ち自らを治め力を蓄えよ。  
何氏曰く、魏の滿寵が吳を征すが如し、諸將に敕して曰く、「今夕に風は甚しく猛し、賊必ず來りて我が營を燒かむ、宜しく之に備を為せ」と。諸軍皆て警す。夜半に、果して來りて營を燒く，寵は掩擊して之を破るは是なり。  
張預曰く、其の火勢を盡し、變亂せば則ち攻め、安靜ならば則ち退け。  
  
（火可發於外，無待於內，以時發之。）  
李筌曰：魏武は袁紹を官渡に破る、許攸が計を用いて、輜重萬餘を燒くは、則ち其の義なり。  
杜牧曰く、上文に云う五火の變須からく內に發る。若し敵が荒澤草穢に居る、或は營栅が焚く可き地ならば、即ち須べからく時及（いた）れば火を發（おこ）し、必ずしも更に內に發し然り作（おこ）るを待ちて後に之に應ずにあらず。恐るらく敵人が自ら野草を燒かば、我が火を起すは益無し。漢時に李陵（りりょ）が匈奴を征し、戰に敗れ、單于（ぜんう）の為に逐われる所、大澤に及（いた）る。匈奴は上風に火を縱ち、陵は亦先に火を放ち兼葭を燒き斷ち，火勢を絕つを用う。  
陳皥曰く、時を以て之を發し、所謂天の燥、月の宿は四星に在り。  
賈林曰く、火は外に發す可し、必ずしも內應を待たず。時を得れば即ち應じて發す、常勢に拘（とらわ）る可からず。  
梅堯臣は杜牧が註に同じ。  
張預曰く、火は亦外に發す可し。必ずしも須べからく內に作るを待たず。但に便有れば則ち時に應じて發せ。黃巾の賊の張角（ちょうかく）は漢將の皇甫嵩（こうほすう）を長社に圍み、賊は草に依りて營を結ぶ。嵩は銳士をして間せしめ圍外に出だし、火を縱ちて大いに呼ばしむ。城上では燎を舉げて之に應ず。嵩は鼓に因りて其の陳を奔らせば、賊は驚亂し、遂に敗走す。  
  
（火發上風，無攻下風。）  
曹操曰く、不便なり。  
李筌曰く、隋江東の賊の劉元（りゅうげん）は進みて王世充を延陵に攻め、令して草を東方に把（と）り、風に因りて火を縱たしむ。俄にして風が迴り、悉く元の進む營を燒き、軍人多く死者。  
杜牧曰く、若し是れが東ならば、則ち敵の東を焚き、我も亦隨いて以て其の東を攻む。若し火が東面に發り、其の西を攻めば、則ち敵人と同じく受くなり。故に下風を攻むこと無かれ、則ち風に順うなり。若し東に舉れば、其の他を知る可し。  
梅堯臣曰く、火勢に逆（迎撃）せば、便に非ず、敵は必ず死戰す。  
王晳曰く、或いは其の左右を擊つこと可なり。  
張預曰く、燒きて必ず退（ひ）け、退きて逆に之を擊てば、必ず死戰す。故に便ならず。  
  
（晝風久，夜風止。）  
曹操曰く、數（しばしば）當然なり。  
李筌曰く、終始せず。  
杜牧曰く、老子の曰く「飄風は朝を終えず（つむじ風は朝にうちに止む）」と。  
梅堯臣曰く、凡そ晝風は必ず夜に止む、夜風は必ず晝に止む、數當然なり。  
王晳は梅堯臣が註に同じ。  
張預曰く、晝起れば則ち夜に息（や）む、數當然なり。故に老子の曰く「飄風は朝を終えず」と。  
  
（凡軍必知有五火之變，以數守之。）  
杜牧曰く、須べからく星躔（日月星辰運行の度次）の數を算し、風の起る日を守り、乃ち火を發す可し、偶然にして之を為す可からず。  
杜佑曰く、既にして五火五變の起るを知れば、當に復た數を以て其の可否を消息（斟酌）すべし。  
梅堯臣曰く、星の躔を數（推測）し、以て風起の日を候い、然して火を發し、亦當に自ら其の變に防（そな）うべし。  
張預曰く、火を以て人を攻むを知るに止（とど）まる可からず、亦當に人が己を攻むを防ぐべし。四星の度數を推（測）して、風の起る日を知る、則ち嚴しく備えて之を守る。  
  
（故以火佐攻者明，）  
梅堯臣曰く、明白易にして勝つ。  
張預曰く、火を用い攻を助く、灼然として以て勝を取る可し。  
  
（以水佐攻者強。）  
杜佑曰く、水以て衝を為す、故に強し。  
梅堯臣曰く、勢の強なり。  
張預曰く、水能く敵の軍を分つ。彼の勢を分かたば、則ち我が勢は強し。  
  
（水可以絕，不可以奪。）  
曹操曰く、火で佐くに、勝を取るは明なり。水で佐くは、但に以て敵の道を絕ち、敵軍を分かつ可し、以て敵の蓄積を奪う可からず。  
李筌曰く、軍は、必ず術數を守り、而して之を水火で佐く、明強の所以なり。光武の王莽を敗る、魏武の呂布を擒にす、皆て其の義なり。水を以て敵人の軍を絕ち、分けて二と為さば則ち可なり、以て敵人の蓄積を奪うこと難し。  
杜牧曰く、水は敵の糧道を絕ち、敵の救援を絕ち、敵の奔逸を絕ち、敵の衝擊を絕つ可し。水を以て險要の蓄積を奪う可からず。  
王晳曰く、強は、其の決注の暴（河を決壊させることか？）を取る。  
張預曰く、水止は能く敵軍を隔絕す、前後を相及ばしめず、其の一時の勝を取る。然るに、火能く敵の積聚を焚きて奪い、之を滅亡せしむにるに若かず。韓信が決水し楚將の龍且を斬るが若くは、是れ一時の勝なり。曹公が袁紹の輜重を焚きて、紹は因りて以て敗れる、是れ之を滅亡せしむなり。水は火に若かず、故に火に詳（ことごとく）して水に略（おおまか）とす。  
  
（夫戰勝攻取，而不修其功者凶，命曰費留。）  
曹操曰く、水が留（とどま）るが若し、復び還（めぐ）らず。或に曰く、賞時を以てせずんば、但に費留なり、賞日を逾えざるが善し、と。  
李筌曰く、賞日を逾えず、罰時を逾えず。功が立ちて賞せず、罪有りて罰せずが若きは、則ち士卒疑惑す。有費を日うなり。  
杜牧曰く、修は舉なり。夫れ戰勝して攻めて取り、若し、功有るを舉げて之を賞すに藉（よ）らずんば、則ち三軍の士は、必ず命を用いず（命令に従わない）。則ち凶咎有りて、徒（いたずら）に留滯し費耗し（無駄に時を過ごし浪費し）、終（つい）に事を成さず。  
賈林曰く、費留は惜費（けちる）なり。  
梅堯臣曰く、戰いて必勝欲（せ）んとし、攻めて必ず取るは、利に因り便に乘ずに在り、能く功を作為（な）す。功を作為すは、火攻、水攻の類を修む、坐して其の利を守る可からず。坐して其の利を守るは、凶なり。是を費留と謂わん。  
王晳曰く、戰勝して攻め取り、而して功賞の差を修めずんば、則ち人勸めず。勸めずんば、則ち財を費し、師（師団）を老（疲労）し、凶害なるのみ。  
張預曰く、戰攻して能く必勝必取す所以は、水火の助なり。水火能く破軍敗敵す所以は、士卒の命を用うなり。有功を舉げて之を賞すを修めざるは、凶咎の道なり。財は竭き師は老し歸るを得ずんば、費留の謂なり。  
  
（故曰：明主慮之，良將修之。）  
杜牧曰く、黃石公曰く、「夫れ霸者は、士を制すに權を以てし、士を結ぶに信を以てし、士を使うに賞を以てす。信衰えば則ち士は疏し、賞虧けば則ち士は用を為さず。」  
賈林曰く、明主は其の事を慮り、良將は其の功を修む。  
梅堯臣曰く、始めは則ち君が其の慮を發し、終えるに則ち將が其の功を修む。  
張預曰く、君は當に攻戰の事を謀慮すべし、將は當に剋捷の功を舉げて修むべし。  
  
（非利不動，）  
李筌曰く、明主賢將は、利を見るに非ずんば兵を起こさず。  
杜牧曰く、先ず起兵の利を見て、然る後に兵を起せ。  
梅堯臣曰く、凡そ兵は、民に利非ずんば、興さず。一に作る、「利に非ずんば起さず」と。  
  
  
（非得不用，）  
杜牧曰く、先ず敵人を得る可きかを見て、然して後に兵を用う。  
賈林曰く、其の利を得るに非ずんば、用いず。  
  
（非危不戰。）  
曹操曰く、不得已而（やむをえずして）兵を用う。  
李筌曰く、危に至るに非ずんば戰はず。  
梅堯臣曰く、凡そ兵を用うは、危急に非ずんば戰わず、重凶の器なるが所以なり。  
張預曰く、兵は凶器、戰は危事。須べからず禍敗を防ぐべし、輕舉す可からず、不得已而して後に用う。  
  
（主不可以怒而興師，）  
王晳曰く、但に怒を以てす可からず。息侯が鄭を伐つが若し。  
張預曰く、怒に因りて師を興して、亡者は鮮らず。息侯（そくこう）が鄭伯と違言（言い争い）有りて鄭を伐ち、君子是れ以て息の將亡すを知るが若し。  
  
（將不可以愠而致戰，）  
王晳曰く、但に慍を以てす可からず、晉の趙穿（ちょうせん）の若し。  
張預曰く、忿に因りて戰い、敗れざるは罕有（滅多にない）。姚襄（ようじょう）怒るが若し、符黃眉（ふこうび）壘を壓して陳す、因りて出て戰い、黃眉の為に敗れる所は是なり。怒が慍より大、故に以て主之を言う。慍が怒より小、故に以て將之を言う。君則ち以て兵を興すべきも、將則ち戰と言う可きを止む。  
  
（合於利而動，不合於利而止；）  
曹操曰く、以て己の喜怒を得ずして兵を用う。  
賈林曰く、慍怒內に作（おこ）らば、安危を顧みず、固（もと）より可からず。  
杜佑曰く、人主眾を聚め軍を興こせば、道理を以て勝負を計れ、己が私怒を以てす可からず。將兵を舉げば則ち策を以てし、慍恚（怨恨惱怒）の故を以て合戰す可からず。  
梅堯臣曰く、兵は義を以て動け、怒を以て興すこと無れ。戰は利を以て勝て、慍を以て敗れること無れ。  
張預曰く、己が喜怒に因りて兵を用う可からず、當に利害の在る所を顧（かえりみ）るべし。尉繚子曰く、「兵を起こすに忿を以てす可きに非ず。勝を見れば則ち興し、勝を見ずんば則ち止む」。  
  
（怒可以復喜，慍可以復悅；）  
張預曰く、色に見ゆるは、之を喜と謂う。心に得るは、之を悅と謂う。  
  
（亡國不可以復存，死者不可以復生。）  
杜牧曰く、亡國は、亡人の國に能うに非ず。言うは、德を度（はか）らず、力を量らず、怒に因りて師を興し、慍に因りて合戰せば、則ち其の兵は自から死し、其の國は自から亡ぶものなり。  
杜佑曰く、凡そ主が怒りて軍を興し人を伐ち、素より明計を謀ること無くんば、則ち破れ亡びん。將が慍怒して鬬い、倉卒（だしぬけ）に合戰せば、傷殺する所は必ず多し。怒慍は復（また）以て悅喜す可し、言うは、亡國は復（ふたた）び存す可からず、死者は復び生く可からざるもの、當に之を慎しむべきを言う。  
梅堯臣曰く、一時の怒は、返りて喜ぶ可し。一時の慍は、返りて悅ぶ可し。國が亡び軍が死せば、已を復びす可からず。  
王晳曰く、喜怒は無常、則ち威信去らん。  
張預曰く、君が怒に因りて兵を興さば、則ち國は必ず亡びん。將が慍に因りて輕がるしく戰えば、則ち士が必ず死ぬ。  
  
（故明君慎之，良將警之，此安國全軍之道也。）  
杜牧曰く、警は、之を戒（いまし）むを言う。  
梅堯臣曰く、主は當に慎重にすべし、將は當に警（いまし）め懼（おそ）るべし。  
張預曰く、君が常に用兵を慎しめば、則ち以て國を安んず可し。將が常に輕戰（かるがるしくたたかうこと）に戒めば、則ち以て軍を全（まっとう）す可し。